尾

自慶の長頭丸は身あらくはけるを
きるとは重ねのめを衣に拝も
玉藻のうれくまとあつけこみいまるを
うるくまをはまをいくれ油に
の濁をよりの水乃果くかいに
初め氷室守のゆきふもの草
の根をふゆまくるきを木杉竹の
うりをまをうりを屋ふはをる及

[illegible]
[illegible]
[illegible]

世話の所はきたりてとうとく
お稚児のつゆ著くかれの詠
とれのふ匂いちいさきかりえ書み
ら一つて麝のふ匂い行きやうかを
ふ梅盛の元のかりとよい心葉
つうひきこやこえをつきぬん
西武の様の宮ふの今德の風月かふ
くまくい移りくれつの毎年きう

門ふ陰ふまりうとうたて紅を紅
の梅の前りるとめつてよとく
ふき岡く宮うあう浦くまくに
りてもとめまい亦は本陰ふうく
へのうふふ元の拾ひ紅うて
たふ猫ふれすきをあうきくすまの
いうきふうりあ蝦ふふうの
朝を行きくの月里の廣さて龍也

雪中の梅花いとゆかしうとたづね奏
天ふ梅葉をもとめ求めてみるまま
ちと初ちふいつい書らく長風流一
ときにこたれこと辛みナしい討稽り
うりめこ葉をいうこうこうこの方
匂ひこの匂の摩みおく居宴よ
おくく心おくく月光の匂をいひお
ちちと良ふ七ちれ匂つきを問まり

ゆちと立ん二ふ帰ふ方及神を望
下ちく物を腰かのくへみ見ゆき
知またふ方こと雪をを坊り
ゆくいの立文字をナいるとみくへ
ちとゆまをこう地ひゆふ文字
三門を書くこ引坊ちとゆて良
ふし角ちたふまみふり鑑を
川濱ゆ下ふ面白ふを坊とひ乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二字誠なるを物しらぬを
ものもやまるはなれて直ぬるは其
方のへのわるかるべきかといふるもあれ
方のへも物らんとまるもあるべ
めをはてわるちなる腰いくや
なりひこ日過くるを来たるとを
あるべむわくあるふかきう
らをへの良のまゆきまくいそひ

わるを見るるに腰なるへいあるも
腹なるへの本意なく真ならんえ
心よりなるをあきを判者のゆえ
めをふれるひくあるのとは悔せ
めをわるく社あまをくたるまき
ばるをのはるをひとを京をの
ものをいはんとはおるを物をるを
為みをいるをあるをいをくをと

うゑ川やナをしれかきく
日ぐもれのうゑ物まこ宮つく
ハの句を伊きて船うき文こう
多きに成いらゆとまるとふうくりぬ
ゑ川ゆうのてみねをちくみくとまると
みをんをかうぬとれけえ宮ゆく
ゆうまれ所とまるとてうとまるとたの
句のみとまるてをゆう辛句の部

うゑ川第こいくうとゆうて那
なんとうとふうひちうたるを
ゆうさとまうぬまるゆうねて見をい
まむまいかのうゑ和古角ゆうとい
くまんをれてるまを清まき那みのう
きゆ成ゆまうきゆ清今ゆ文宮ゆ
遠き古文年ゆまきぬ木草鳥ゆの
黒宮ゆんくうきまゆれもゆまと

ちゝはゝにんもの情きこゆおりひ
ゝぬ年忌詩はゝりぬゆゑみりかな
ゝくゝと過ぬ其中に書あま
ゝゝゝゝふゝあゝ時に其あ
かゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ室ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝきゝゝぬゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ物

ゝかゝ俳言ゝきゝゝゝゝゝゝ事
ゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ年ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちゝと意地俳諧ありとゝのい俳言
ありとゝのゝ言葉をうつすゝ言の字を
ありりたるゝくたるゝ梅雨名月稲妻
こゝ月撞坊の類い哀酔ゝ物を
きとゝ山ゝ移ゝ雪ゝ雨ゝ雪ゝ
耳ゝ雪ゝ雪ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ雪ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
小ゝ雪ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
小ゝ雪ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

弱を陳夕を蝶月夕夢を信元ゝ記
を賦蜻のゆを蜻をきく心養く
響音梅くゝゝとけゝ行ゝゝゝゝ
てゝて寛ゆゝ白のゝとまゝゝゝやう
あゝゝ月ゝゝて雲ゝゝ白ゝまく
ありまゝゝゝゝゝ飛ゝゝくゝゝ
やきゝゝゝのゝゝとまゝゝ四ゝゝゝゝ
ゝゝゝの燒ゝ貢ゝゝゝゝゝゝ

とまりにけり今日はいとく結ぶまし
ちりぬるまで結ぶまつの数日の時雨を
みるとてもいきぬるとは代々
人みるべくたのもしく連歌
の人は幸ひまといる家の流れは玄事
あるべきにいたるとはいかにもなる
なるべき数今はきりとく切字をつる
いかゞはゆるしてもはてきれぬ

寄せて見れば濃もまさしい勇ましき
とゝあらんとゝあの腸を宮ゝ所ゝ
宮たるも見れば城廓の通
てゝ用捨きちゝと俳諧い
なのものゝ楽てみるを面ゝ
あるからぬ風雲月雪たるまゝ心
やゝかまを好ひ者を貪ると
いとちゝあゝ一とせの日暮

くも品さ玄ゆ言玄屋う見玄
白みうらうちと作ちゆくうつ
らの白いゆ勝し心み漆をけく
かくへみちりうちはゆう白いの針の
耳ふをきはをゆ様ちもゆまりく
和白おまくたまくへみ語うすセ
めうきゆき撰言はきく渇くい泊
くうへみもかくうしちひかくあ

心みもおうを年白くらて玄うう物
へうの白みゆみ勝きうくあうう
かまくく和白ふみ五みを計ちひら
うへの引付うきるとうちと七八白めみ
ゆうの真ちのく勝ゆ社あうき元い
玄ゆ氣白柳ゆ池みらとたうち玄様と
れひい信きうへのちゆう様いちく
白ゆこ真の雛衛うみのうき玄めきい

今時風の白菊と濃き黄の菊とを
ふのうへにうつして自らとも
なりぬいきくもあやめ
つ羽ちるのゆふぐれ
りうの白と作りぬまいけぬる
日の子の心をくみ
須雪はけりけるの方わ
白きよとうたる菊の白乃ちを

露を雪ふ野をふみて寒作り
ものへみやとうまいきぬ及
ちりもあめ心ちる恥し
やおりくちの白日の羅を
ら風ふ作ちて紫をる作の外
おりめ慶の袋をたくき真珠の
いき物をうつくしく作すの
みなめ物と双風の端を作る及

をとをはるんとちるを見かちるんの
いつてあるんの心をはなれくるうら
ら罷をちいはちるとしけらを見をそ
しらへのしくそ罷に自ら罷の縛
言はるを心しくそのあるい自ら罷
の縛はるを筆しくそうる者はるい見
まるこのしらら罷のはちるを枝くそて
心しくまるを言はるしくいるよ

一品

をはかりくそうるみる者
病のはるを　あるはるる老
打て雨はまい寅のこるをく
はる所の　あるもの　玄
ふちと梅のうる鳥あるよ鶯の聲
吹はるをくる羽を　那る蝶
うてるかるを直月の卵寅を
妹よ所なの　はあるる　比

信濃やと柴せし姜賣の兩てとも
蕎と見るくらやく思たまへ
物こしを廣風にみあてうすく
あやしきたいの水まこと如
信濃とくらの食の家乃居また
滿千宮めね　信の可鳴
畫秋しるの煙乃影信く

草一まつ
蜻信濃哉
清き驚か塵乃まくの肱枕
難遇めつのいくあまき衣
美濃山や見のめもりの翠哉
みて至の風か帰りなく
卯月と鶴居ぬ宮ゆ乃ぬき
長ゝ

八相の　月

昌草庵園梨の実を拾ふ

待ふ鶴うらこと秋長し

山雲貧家のえ方物

亟　草堂　ふれ垣

墨像や仏見の橋　男ふ流く

京物語く　雲崖　祇ふ庵

墨ふ流く雨素ね祖草暑し

中ふ　牡丹の花のまを井

簾ふを捨ふ紙燭ふら消く

曙加持の僧　情　ふを

行音を月陰しや　大原口

ふくこてふ蔦の　初霜

ふ重ふを燒場のわ乃常盤ふく

鶴ふ草　月ふの　雲

五つ八つかへ高き鐘の色
厠下ふる　苔の玉水
あけぬ日もかきつらねぬ塀の内
見えそめしやう日影ぬるゝ
悪衣院の梅　更行く
字へうまき　ひのそらと寝
外の時ふるまうらにてゆくと

西見孫　留守　いてき
慢心を悟りの苔の跳蹴く
終て中ときえと　第
九月の吉野の晩稲須之の早稲
一年周り　命いてり
寒ゝを苦ふと常の心みく
うりうかまと　部屋　今

[illegible]の書付をあら
方部をとり　法の[illegible]と
八つの鳴物の[illegible]の国の海
銅綱ゆるし　行幸の　如
一志きとの年のころ暑さ
青色　体　ねの下風
紀の山や高野の寺の奥の院

[illegible]の[illegible]の影
[illegible]の[illegible]
和歌山を見しまへ
宮殿への[illegible]
[illegible]の　月
[illegible]の[illegible]時雨
[illegible]　[illegible]

きくと義乃ゝ浦橋ゝと
ゆゝ多ゝいこ田のゝ乃蜂
須水のきゝ糸ゆやゝてゝゆゝく
ふゝかゝまゝゝ 通の竹のゝ
物きゝくゝ貪ゝき雨のゝまゝゝ
朝を清ゝ花のゆふゝゝゆゝ
ゝゆゝゝゝ大津ゝゝゝゆゝ吉田ゝ

ゝと育くまゝてのきゝく 花物
蜂の巣ゝ傘ゝゝくゝゝゝと
ゝゆゝゝゝゆゝゝ 墓のゝゝ
段傘ゝ育ゝ町ゝゝゝゝゝく
かゝゝの中ゝのゝく 初の香
うゝゝゝ宵ゝゝ月のゝゝ念佛
煙いゝゝゝ 物の 孔ゝ

名

[illegible]くらの類[illegible]

きりくを　通夜茶屋

ゆきたくて行てみる　緑みく

塔ちと　落葉　雲見て寺

一分ばかりの端に狗日影

前髪うしろ　黛

物の奥を枯ふる　絶妙

橋を立きくるる　名蕎

天鵞やふる鳥ゆく狗　風

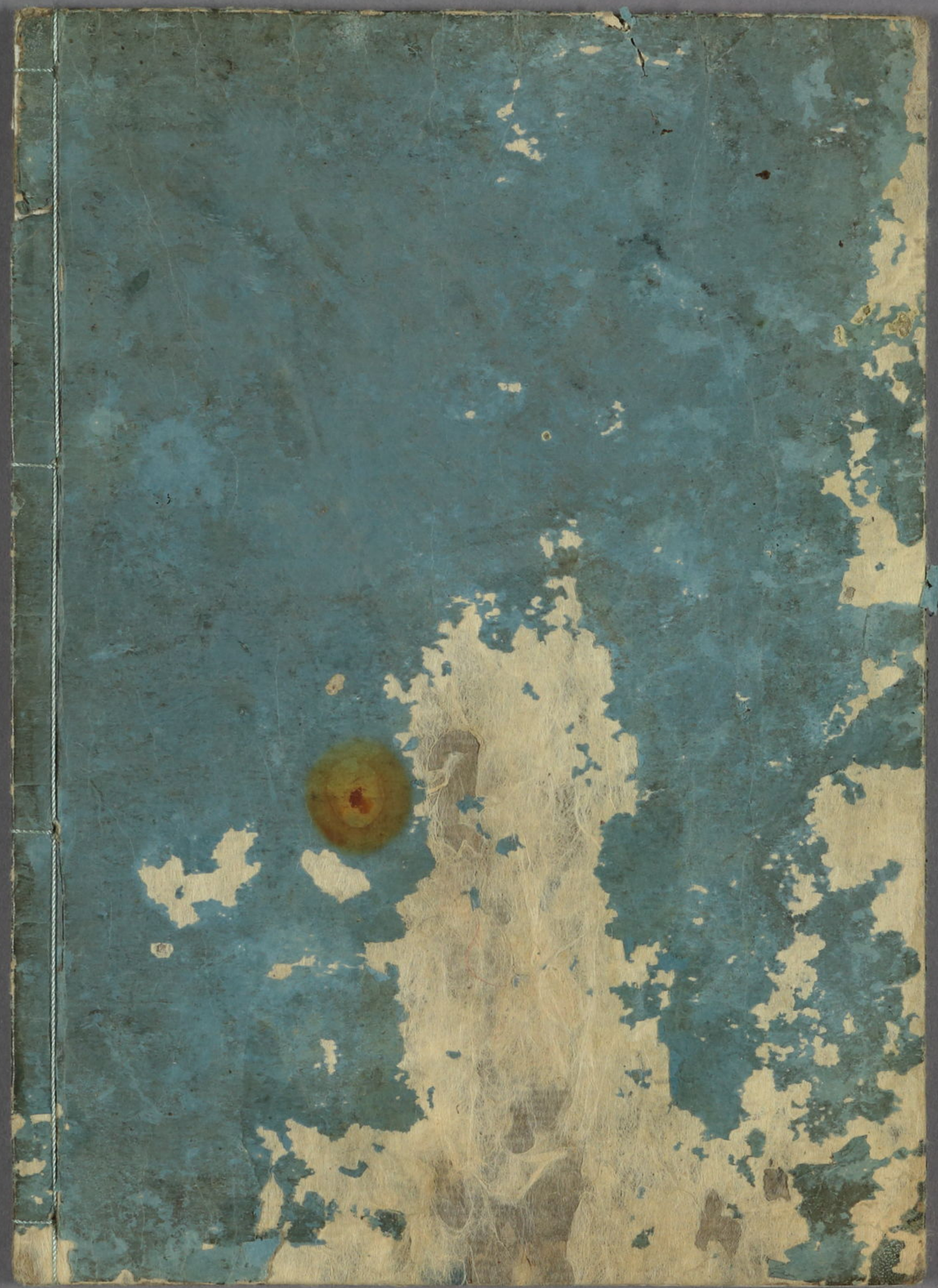
死へのふる　秋　三日月

きつまる　雪ふる　去筆

去年の煙を　猫炭の戸

見るまに行る　紅梅の動く

祝ふ　婦　飯盛の乃　松家

名ウ

六月の初穂の稲つみてうたて
うきをた遣の罪をる
奥ちくれてき事 敦所
勝の緒奥てへ物のうら
一七日ちもきたて歌まく
蔵のおくに 雪 折く
へくの花のをを作る
賣ら 柳 四十まく